

# ガリシア語の社会言語学的考察

浅 香 武 和

## はじめに

2003 年は、ガリシア語正常化法制定 20 年にあたる。この 21 世紀初めガリシア語はまだ正常な状態ではなく多くの分野で排斥され、ガリシア語の使用は話者にとり社会的または政治的な問題を巻き込んでいるのが現在の状況である。さらに異なる年齢層のあいだのコミュニケーションは遮断の危機にある。言語正常化法施行 20 年が経ち、その掲げる思想に向かって進行中であるといえる。本論は、現在のガリシア語の状況を社会言語学的な観点から考察する。

本論を執筆中の 2003 年 7 月 10 日ガリシア語の表記及び形態に関する規則の改正がリアル・アカデミア・ガレーガで承認された。

## 1 ガリシア語の話されている地域

ガリシア語はイベロ・ロマンス諸語のグループに属するロマンス語の一言語であり、ガリシア語の特徴（形態と語彙）のある部分はポルトガル語と共通である。ガリシアではカスティーリャ語と共にガリシア語は公用語である。

現在のガリシア語は、行政上のガリシア自治州 (29,424km<sup>2</sup>) と行政上ガリシアに属さない地域（アストゥリアス州のナビア・エオ、アンカーレス東部、レオン県のビエルソ西部、サモーラ県のポルテーラス）の言語である。言語的観点からみるとガリシア語の境界線は南部ではポルトガル語、東部ではアストゥリアス語またはレオン方言と接している。ガリシアの人

口はガリシア政府発行の 1997 年の統計報告によると 274 万 3999 人 (1996 年の調査) である。1991 年の調査では、ガリシア語を理解するは 94 %で、ガリシア語を話すは 88 %である。さらにガリシアに隣接する地域で 8 万人程度がガリシア語を話している。参考までに 1991 年の調査では人口は 273 万 1669 人、1978 年の調査では 289 万 5469 人であった。

### 1.1. ガリシア語の歴史的背景

最初にガリシア語の歴史的背景を簡単に述べておこう。13 世紀と 14 世紀はガリシア語にとり輝く時期でありカンティーガスと呼ばれる抒情詩が栄えた時であり、行政や司法の文書にガリシア語が使われていた。16 世紀中頃までガリシア語は使われていたが、15 世紀のカトリック両王の時代になると没落したガリシアの貴族たちはカスティーリャ語を使い始めるようになり、聖職者たちもカスティーリャ語を植えつけていった。ルネッサンスの時期から他のロマンス諸語は国家語として体系化されていくが、ガリシア語は書き言葉としての性格を失い、話し言葉として田舎や家族の間での言葉になっていった。16 世紀から 18 世紀は沈黙の世紀と呼ばれガリシア語は威信を失った。しかし、18 世紀にサルミエント神父が現れガリシア語の回復を図りガリシア語研究をすすめた。

19 世紀中頃になるとプロビンシアルリスモやレシヨナリスモの政治運動がおこり、文学ではレシュルディメントと呼ばれる文芸復興がおこりロサリア・デ・カストロの『ガリシアのうた』が 1863 年に発行された。エドゥアルド・ポンダルとクーロス・エンリーケスが続いて現れ、ガリシア語による詩集を発行した。この三人はガリシアの文芸復興期の「三大花冠」と呼ばれている。この時期にはガリシア語の最初の文法書や辞書も刊行され、1906 年には「ガリシア語の収集・純化・刷新」を掲げてリアル・アカデミア・ガレーガも創設された。20 世紀にはいると *Irmandades dos Amigos da Fala* (ことばの友好協会) が形成され、ガリシア全域に広がりガリシア語の擁護と普及をうたい、後に政治運動に進展していった。1936 年 6 月にはガリシア語は初めて公用語に認められた。しかし市民戦争 (1936-1939) はガリシア語の近代化の過程の道に後退の引きがねとなり 1960 年代まで停滞をたどった。1960 年代を社会言語学的状況から見ると、学校教育の整備とテレビなどのひろがり新しい文化価値はカスティーリャ語の導入につながっていった。しかし急速なカスティーリャ語化

に抵抗する団体も現れ、ガリシア語を擁護する目的で都市部では様々な文化的な組織網が拡大していった。70年代に入るとナショナリズムと共にことばの擁護を訴え、ガリシア語の使用のための標準語化をめざすようになっていった。

## 2 自治州憲章と言語正常化法におけるガリシア語の扱い方

ガリシア自治州憲章（1981年4月6日承認）第五条は次のように記している。

- 第一項 ガリシアの固有の言語はガリシア語である。
- 第二項 ガリシアの公用語であるガリシア語とカスティーリャ語を、全ての人には知る権利と使う権利がある。
- 第三項 ガリシアの公権力は二つのことばの日常と公式の使用を保障して、生活と文化と情報のあらゆる面においてガリシア語の使用を可能にして、その知識を利用するための必要な手段を用意する。
- 第四項 何人も言語が原因で差別されることはない。

このように、ガリシアの固有の言語はガリシア語であると宣言し、ガリシア語とカスティーリャ語の二つを共に公用語に認め、ガリシア語の促進に公的な権限を抱き込み、同時に言語を論題にして市民を差別しないという原則を立てた。

1983年6月にはガリシア議会は言語正常化法を承認した。これはカスティーリャ語とガリシア語の比較が主なる目的であり、そのためにガリシア語の完全な公的性格の原則を築くことであった。第六条第二項は、ガリシアにおいて行政上ガリシア語が通用し、公用語が使用される時はどんな場合でも有効である、と記している。この法は、司法と制度の分野で進展が期待されたが、目的と手段において自治州政府が明確性を欠如したことにより限界が起きた。

言語正常化法が示す目的を遂行するような方策の計画と管理を担う言語政策局がガリシア政府のなかに設置された。この政策局の設置は、教育をあずかる教育省の一部門と考えられガリシア語を推進する力が僅かで、またガリシア語の使用において年代間の憂慮すべき衰退を考慮した現在必要な言語政策の計画を実施する専門家が欠如していたことが理由になり、遂

行したとは言えない。言語正常化法が承認されて 15 年後には、貧困なイメージのガリシア語と権力を持ったカスティーリャ語という偏見のイメージを取り去ったということができる。したがって、ガリシア語は現在、話す場合も書く場合も正しい規定どおりの方法で使われている。政治の面においても知識層のあいだでも日常語であり、初等・中等教育で学習が義務づけられている（他の科目では伝達手段としての言語である）。自治州政府の行政上の言語であり教育に役立つ官公庁の言語であり、ラジオとテレビジョンガレーガの言語でもある。近年のガリシア語の社会的使用の進展にもかかわらず、ガリシア社会は言語的にカスティーリャ語に強く服従している。つまり、カスティーリャ語は教育における伝達手段のことばであり、さらに行政機関の公務員のかなりの人々の伝達手段のことばであり、同時にガリシアの人々が読んだり聞いたりする刊行物のことばであり、ラジオとテレビのことばは大多数がほぼカスティーリャ語であるからにはかならないからである。

## 2.1. 社会におけるガリシア語

ガリシアの社会言語学地図によると、ガリシア社会におけることばの習得は高い能力を示している。人口の 96.9 % がガリシア語を理解でき、85.6 % が話せ、一方 46.6 % は読める能力があり、27.5 % は書ける能力があることを示している。

表 1 四段階の能力 Fernández Rodríguez/Rodríguez Neira 1995 b

	ゼロ	少し	かなり	とてもよく
理解できる	0.1	3.0	48.6	48.3
話せる	2.3	12.1	45.5	40.1
読める	11.6	41.8	31.4	15.2
書ける	32.6	39.9	18.1	9.4

Fernández Rodríguez / Rodríguez Neira (1995a, 1995b) 『ガリシアにおける生まれて最初の言語』と『ガリシアにおける日常の言語』の統計から考察してみる。生まれて最初の言語としてガリシア語は 60.3 % である。一方、日常の言語としては 68.6 % であり、ガリシア語だけを話す割合は

38.7%，ガリシア語を好んで話すは 29.9% である。

さらに、これらの要素を年齢別・社会階層別・学歴別・住んでいる地域別に検討してみたい。生まれて最初の言語がガリシア語は 80.6%，日常の言語がガリシア語は 84.7% という高い数値は 65 歳以上の年齢層である。16 から 25 歳の年代では 36.7% が生まれて最初の言語で、日常の言語は 46.5% である。社会階層別にみると中流から上流は生まれて最初の言語としてガリシア語は 28.1% と少ない数値であり、日常の言語では 35.3% である。一方、下層階級では生まれて最初の言語にガリシア語は 75.3% が話すために学んでいるし、日常の言語として 83% がガリシア語を話しているように高い数値を示している。

出生地については、生まれて最初の言語と日常の言語のガリシア語の割合は観光地を持たない田舎（村-2）ではそれぞれ 85.8% と 89.7% であり、観光地を持つ田舎（村-1）は生まれて最初の言語としてガリシア語は 66.7% で、日常の言語としてのガリシア語は 78.6% である。小さな町では生まれて最初の言語がガリシア語は 51% であり、日常の言語としてガリシア語は 65.4% で、都市周辺では生まれて最初の言語がガリシア語は 61.5% で、日常の言語がガリシア語は 64.6% である。都市においては、生まれて最初の言語がガリシア語は 16.7% であり、日常の言語がガリシア語は 37.7% である。また話者の学歴との関係は日常の言語としてガリシア語は学歴のない人の比率は 95.8% という高い数値であり、小学中途者は 86.9%，小学卒は 72.8% である。それに反して高学歴の人は 71.4% がカスティーリャ語を使い、高卒者は 63%，中等教育終了者は 60.1% がカスティーリャ語を使う。

さらに生まれて最初の言語と日常言語にガリシア語を使う人は社会的地位・年齢層・学歴・住んでいる地域を考えると、老年層・中から下層階級・小学卒程度の人がガリシア語話者の高い数値を示している。それに対してカスティーリャ語は都市部の共通語であり、若者層と教育水準が高く経済的に豊かな人の言葉であると言える。このようなガリシアの状況は、ガリシア語話者の大部分が二つの言語を使い分ける、つまり代替的二言語併用の例である。これを Fernández (1978) は闘争的な二言語の使い分け (DIGLOSLIA CONFLICTIVA) と形容している。

表2 ガリシアにおける生まれて最初の言語 [イタリック体] と日常の言語の調査統計 1995ab

	ガリシア語だけ	ガリシア語が多い	カステイリャ語が多い	カステイリャ語だけ	その他
最初	60.3 %	11.9 %	[両方]	27.2 %	0.6 %
全体	38.7 %	29.9 %	20.8 %	10.6 %	
日常の言語 (%)					
年齢別					
16-25	23.5	23.0	35.7	17.7	
26-40	30.2	32.2	24.8	12.9	
41-65	43.5	33.8	15.2	7.5	
65 以上	58.9	25.8	9.5	5.8	
学歴別					
無	75.3	20.5	3.3	0.9	
小学中退	56.9	30.0	8.8	4.2	
小学卒	35.5	37.3	18.2	9.0	
専門学校卒	22.2	31.1	32.3	14.4	
中高卒	15.0	24.9	39.1	21.0	
大卒基礎過程	9.7	27.3	41.4	21.6	
大卒専門過程	9.2	19.4	45.6	25.8	
その他	17.0	41.4	24.4	17.2	
社会階層別					
低	55.7	27.3	11.0	6.0	
低から中	47.7	31.6	14.7	6.0	
中	29.2	29.4	27.0	14.4	
中から高	14.1	21.2	37.0	27.7	
職業別					
経営者	35.8	41.8	16.6	5.8	
有資格者	6.3	19.6	46.7	27.4	
自由業	3.8	22.5	50.7	23.0	
教育者	12.1	32.2	37.3	18.5	
軍人	13.9	38.5	31.4	16.1	
下級行政職	20.3	34.5	29.9	15.3	
サービス業	19.0	36.4	29.6	15.1	
自営業	42.4	37.6	13.9	6.2	
農業	85.9	13.2	0.6	0.3	
漁業	59.4	33.0	6.6	0.9	
工員	38.1	37.8	17.9	6.2	
学生	15.0	18.8	43.6	22.6	
主婦	42.2	31.4	15.7	10.7	

無職	29.0	24.9	25.7	20.4
性別				
男	38.7	32.7	20.4	8.2
女	38.7	27.5	21.1	12.7
地域別				
都市	9.1	28.6	38.2	24.2
都市周辺	23.6	41.0	25.2	10.2
小町	31.8	33.6	24.1	10.6
村-1	42.8	35.9	16.6	4.7
村-2	64.0	25.7	7.5	2.8

## 2.2. 教育におけるガリシア語

教育の分野においては積極的な対策がとられ、1979年の政令で言語教育が許可され、1983年の政令では義務づけられた。さらに1988年の法令で、伝達言語としてガリシア語の使用が立案された。ただし初等教育の中高学年の社会科学。高等教育と大学予科の地理、歴史、自然科学、物理、化学、数学、情報工学、哲学のなかから二科目選択。専門学校では人類学、実技、技術、数学のなかから二科目選択ということである。

現在、計画されている教育改革に向けられたカリキュラムは、初等教育の第二課程と第三課程において自然科学と社会および文化科学の二つの分野の知識を高めるためにガリシア語で教育を行うことを義務化している。一方、中等教育では社会科学、自然科学の分野の科目をガリシア語で教えることが義務化されている。高等教育では、哲学と歴史の共通科目をガリシア語で行うことが義務であり、倫理学・法哲学・政治学・社会学・歴史学・地理学のなかから三科目選択する方法がとられている。他方、ガリシア語はガリシアの教育行政の言語であるため、一般に活動はガリシア語で実行されている。

言語正常化法があるにもかかわらず、学校はガリシア語化というよりもカスティーリャ語化されている。最初の言語としてガリシア語をもつ生徒数のパーセンテージが高いことは良い証拠であるが、学校内で書き言葉にカスティーリャ語を使うは89%で、教師との言葉にカスティーリャ語を使うは51.4%である（『ガリシアの社会言語学地図』1997:25）。現在の自治州の法令では、教育のための言語としてガリシア語を使う具体的な教育体系だけでなく、語学科目とガリシア文学の科目の教育において、さら

にガリシア語を勧めるために、ガリシア語の存在を示す法律が制定されている。すべてはガリシア語を弱体化させようとして、1978年のスペイン憲法においてカスティーリャ語を有利にした不均衡な公用語化を設定した時点から、すでに特典をあたえられているカスティーリャ語を強化させようとするスペイン政府が唱える理想的な二言語主義にたいして、現在のガリシア自治州政府が擁護する「調和のある二言語主義」の言語政策の方針がある。

ガリシア語はガリシアの三つの大学（サンティアゴ、ビーゴ、コルーニャ）で公用語であるが、一般に教師の側でも学生の側でも使用は少ない。サンティアゴ・デ・コンポンテラ大学は他の二つの大学に比べ、ガリシア語の使用が高いのは行政がガリシア語に力を入れているからである。

最近の『サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学のことば』（1998）についての報告では大学の組織を構成する教員、学生、職員の三者の立場から次のデータが示されている。

1. 学生はガリシア語の四つの能力においてとても高い能力を示している。すなわち、90.1%がガリシア語を理解でき、話せて、読めて、書くことができる。学生の三分の一（30.8%）は、ガリシア語が日常語であり、さらに20%は大学の機関で使用し、約10%はレポートや試験またはメモをとるのに使う。
2. 大学の職員の四分の三（75.5%）は、ガリシア語を理解し、話し、読み、書くことができる。さらに54%は日常ガリシア語を話し、カスティーリャ語を話す割合は45%である。ガリシア語で書くことについては、77%がサンティアゴ大学の書類にガリシア語を使って作成し、11.9%はカスティーリャ語とガリシア語の両方を使う。
3. 教師の半数以上が四つの言語能力をもち、52%がガリシア語を理解し、話し、読み書く。この割合を他の二者の立場と比較すると、教育者側は最も低く、学生側より37.9ポイント低く、職員より23.3ポイント低いという結果がでている。したがって、教師側によるガリシア語の使用に関しては、獲得した割合は21.9%で、学生側より8.9ポイント低い結果になり、職員より32.7ポイント低いことがわかる。

教師側と学生側のガリシア語の使用と能力において、最も高い数値は情報工学部と人文学部の機関であり、一方、最も低い数値は実験科



学と保健機関に現れている。

### 3 マスメディアにおけるガリシア語

#### 3.1. 新聞におけるガリシア語

ガリシアの日刊紙において、100パーセントガリシア語で発行している新聞は O CORREO GALEGO (1994年1月から2003年5月まで) だけであった。その後 O CORREO GALEGO は Galicia Hoxe (2003年5月から) に引き継がれている。他の八紙はカスティーリャ語である。なおマドリードで発行されている El Mundo, El País, ABC はガリシア語版のページがある。カスティーリャ語で発行されている日刊紙はガリシア語の使用はわずかである。ガリシア語が使われているのは基本的に文芸欄の寄稿, ガリシアと地域の政治, マンガ時評, テレビシオン・デ・ガリシアの番組欄, そしてガリシア政府の公共広告がとくにガリシア語を使っている。Hermida (1995) は、1977年から1993年の間の日刊紙からガリシア語の使用比率を調査研究した。それによると全般に低い数字であるが、1993年は平均して5.29%とあるのは Diario 16 de Galicia が13.54%という比較的高い数字に助けられたことによるものであろう。次の表は日刊紙のガリシア語使用の割合である。1995年と1997年のデータはHermidaにより追加された未発表ものである。数値は1995年が1993年より2.02%, 1997年は1993年より1.86%低下しているが、平均して3%台を維持している。

	1977	1982	1987	1990	1993	1995	1997
イデアール ガジェゴ	2.01	2.27	1.95	3.02	1.04	-	1.05
アトランティコ	-	-	-	4.20	3.01	2.81	2.85
ディアリオ デ ポンテベドラ	0.71	0.44	1.01	2.96	3.93	2.75	3.50
ファロ デ ビーゴ	1.15	2.25	2.41	2.74	3.94	1.80	2.95
ラ レヒオン	1.28	1.32	1.77	3.60	4.44	4.77	5.05
エル プログレス	0.77	1.27	3.13	2.63	4.95	3.02	4.00
ボス デ ガリシア	2.76	2.78	1.50	5.39	5.41	4.11	3.95
コレッオ ガジェゴ	2.68	1.62	6.12	9.08	7.23	4.65	5.16
ディアリオ 16 デ ガリシア	-	-	-	3.24	13.54	廃刊	
平均	1.62	1.71	2.56	4.11	5.29	3.27	3.43

今日、ガリシア語による学校教育が施行され、ことばにたいする偏見は後退し、新聞におけるガリシア語への見方もかなり好意的なものになっている。『ガリシアの社会言語学地図』(1996) 第三卷補遺、質問事項 72 番「スポーツ放送または新聞における事件報道にガリシア語の使用をどう思うか」に対する回答は、全面的に賛成 32.8 %，かなり賛成 27.8 %，あまり賛成しない 10.3 %，全く反対 4.7 %，関心ない 24.4 % という結果があるように、60.6 % がガリシア語の使用に賛成している。しかし、企業はガリシア語を使用するための誘因となる助成金をガリシア政府から受けているにもかかわらず、伝統的にカスティーリャ語という権力の言語をガリシアで使い続けているマスメディアは経済効率を優先させているのが現実である。日刊紙におけるガリシア語使用の割合を分析した Ferro Ruibal (1998) は、「有料のガリシア」という、つまり言葉にまで金を払って買うという考えは、あまりにもやり過ぎだという印象がある、と述べている。

日刊紙にたいして、週刊新聞の A NOSA TERRA (1977-) や地域のローカル新聞〔O Salnés, Siradella, O Miñor, O Norte など〕は 100 % ガリシア語である。さらに定期的に発行される雑誌 Grial (1963-), Encrucillada (1977-), Agália (1985-), Análise empresarial (1985-), A Trabe de Ouro (1990-), Tempos Novos (1997-) などがガリシア語で発行されている。

### 3.2. テレビとラジオにおけるガリシア語

全国向けのラジオ放送局はカスティーリャ語で放送されている。ただし Radio Voz はガリシア向けの放送に限ってはガリシア語で、また Radio Uno はカスティーリャ語で放送しているが、一日 2 時間 30 分だけガリシア語による番組がある。Radio Galega は 24 時間ガリシア語で放送している。地方自治体運営のローカル放送局は、一般にガリシア語で放送し、民間の放送局はカスティーリャ語で放送している。

1986 年にガリシア自治州政府の行政の下に Radio Televisión de Galicia の公共放送がはじまった。ラジオは途切れることなくガリシア語で放送しているが、テレビは現在、週に 90 時間以上の番組が組まれていて、原則的にすべてガリシア語で放送している。ただ宣伝広告放送の大部分はカスティーリャ語を使っている。ガリシアにおいて第一チャンネルの

Televisión Española は、月曜から金曜まで 45 分だけガリシア語で放送し、第二チャンネルも月曜から金曜まで午後 1 時間のガリシア語による番組がある。Antena 3, Canal +, Tele 5 の全国向けの番組は、すべてカステイーリャ語である。地方のテレビ局の番組はだいたいガリシア語であるが、Televisión da Coruña, Televisión de Vigo, Televisión de Ponteareas はカステイーリャ語で放送している。

ガリシアの家庭では年間 3 万時間カステイーリャ語のテレビ番組を、また 6,000 時間のガリシア語の番組を受け入れることができる。『ガリシアの社会言語学地図』(1995) 第二巻補遺 2 の質問事項 80「ガリシア語でラジオとテレビ番組がもっとあったほうがいいのか」という質問に、65.6% がさらにガリシア語での番組を希望している。6.7% はガリシア語での番組に反対している。この数字は今日一ダースものチャンネルがカステイーリャ語で放送しているので、現在あるデジタル放送の一つと組んでガリシアの家庭にさらにガリシア語による放送を提供するのが望ましいと、Rodríguez Neira (1996) は述べている。さらに、通信について「電波空間は広大であり、ガリシア語の電波空間というものは存在せず、ガリシア語は電波に乗り広大な世界にひろがることができる。ガリシア語は今まさにその入り口にある」と、Santamarina (1998) は結んでいる。少なくとも、電子メールによってガリシア語は [ilgantón@usc.es](mailto:ilgantón@usc.es) から [asakat@dream.ocn.ne.jp](mailto:asakat@dream.ocn.ne.jp) に届く。

## 4 カトリック教会におけるガリシア語

### 4.1. ガリシアと宗教

ガリシアには約 4,000 の教区があり、カトリック教信仰はガリシアの人々の 80% に達している。38% は実践を伴わないカトリック教徒で、38.9% は教理を信じている。そして女性の実践を伴うカトリック教徒は 48.9% で、男性の 33.6% より高いというデータがある。(Ferro Ruibal, 1990)

1961 年から 65 年の第二回バチカン公会議は、儀礼の時にそれぞれの土地の言葉を使うことを命じると、ガリシアではカステイーリャ語が選択された。1976 年 6 月ガリシアの聖職者会議は「ガリシア語による典礼に関する提案」を認可し、町の教会で少なくともガリシア語でミサをあげ、

ガリシア語が唯一の言語である地域では典礼のためのガリシア語化が計られた。ミサ祈祷書 (1987) と、聖書 (1989) の公式なガリシア語版が現れた。

#### 4.2. ガリシア語と宗教

López Muñoz (1989) によるガリシアにおけるカトリック教会の言語使用に関する研究から、聖職者の 85 % はガリシア語を話す、儀式のときには使用しない。ミサにおいては 4.2 % がガリシア語を使い、85.9 % が決してガリシア語は使わないという。ガリシアにおいてミサの 70 % はカスティーリャ語で行われ、22.8 % はガリシア語とカスティーリャ語の二つの言語、7.2 % がガリシア語で行われるという調査結果がでている。Televisión de Galicia には宗教番組があり、ガリシア語によるミサを日曜日に聞くこともできる。

次の表は López Muñoz による、教会と聖職者の使用言語調査のデータである。単位 (%)

		ガリシア語	ガリシア語を好む	カスティーリャ語を好む	カスティーリャ語
A 日常の言語	教区司祭	73	12	12	3
	神学生	27	41	17	13
B 教会にとり 理想的な言語	教区司祭	27	41	25	18
	神学生	37	28	15	5
C ミサの時に 使われる言語		7		23	70

A はガリシアの教区司祭と神学生の日常話す言葉についてのデータ。B は教会にとり理想的な言語モデル。C はミサのときに使われる言語。23 % はガリシア語とカスティーリャ語の二つの言語を使用する数値である。司祭と神学生はガリシア語を使ってミサをすることを望んでいるが。実際はカトリック教会はカスティーリャ語を使っているのが現況である。

次に、カタルーニャとガリシアの教会におけるミサの時の使用言語についてのデータを比較して見てみたい。カタルーニャではカスティーリャ語が 23 %、カタルーニャ語は 77 % という高い数値に反して、ガリシアではカスティーリャ語 70 %、ところどころガリシア語を使うが 22.8 %、ガ

リシア語だけは7.2%という低い数値である。この説明には二つの要因が考えられる。一つはガリシア出身でない教会指導者の強制によるもの。二つめに教会の社会的一体感は低所得者層の人々にはなく、貴族や有産階級のエリートたちと共にあったことによる。そして聖職者たちの多くは伝統的な旧来の態度を守り、ガリシア語の正常化に向けて積極的な態度を採ることはかなり難しいといえる。社会においてガリシアの人々がガリシア語を使っていた時代に、カトリック教会は積極的にカスティーリャ語化を推し進めていたし、現在においてもカスティーリャ語をすすめている。

カスティーリャ語の言語干渉はさまざまな面にあられるが、教会を経由して次のような宗教用語がガリシア語のなかに現れている。arrodillar (axeonllar 跪く), Dios (Deus 神), Iglesia (Igrexa 教会), pueblo (pobo 民衆), siglo (século 世紀) など。( ) はガリシア語である。

## 5 ガリシア語の体系化

1980年ガリシア自治州憲章の承認とガリシア語の公用語制定により、ガリシア語の歴史のなかで初めて、多様性に富むガリシア語から一つのガリシア語をつくり上げる計画において論議が醸しだされた。

1970年代終わりから現在まで、共有の財産としてガリシア語が生きる段階で、形態面において超方言的な現代ガリシア語をつくり上げていった。その例を上げてみることにしたい。一般的な形態においては語尾 *-án/-á* (*man* 手, *irmán* 兄弟 / *ra* 羊毛, *irmá* 姉妹), しかし教養語の場合は *-ano/-ana* (*humano* 人間の / *humana*) である。複数形は *-ns* (*cans* 犬, *cancións* 歌) と *-l* で終わる多音節語の複数形 *-is* (*animais* 動物, *posíbeis* 可能な) の二つの形式がある。人称代名詞二人称の形態 (*ti* 君)。指示詞 (この) 男性形: 女性形: 中性形は *este, esta, esto/isto* である。動詞活用形 *cantades* 直説法現在 2 人称複数形, *colleu* 直説法完了過去 3 人称単数形, *partiu* 直説法 3 人称完了過去単数形。

語彙はカスティーリャ語が侵入しているため方言形で置き換えたものがある。曜日について: *mércores* 水曜日, *xoves* 木曜日, *venres* 金曜日。新語を採用したもの: *beirarrúa* 歩道, *ruela* 横丁, *cadro de persoal* 従業員。中世ガリシア語の資料から選んだ語: *Deus* 神, *igreja* 教会, *pobo* 人々, *dor* 苦悩。教養語: *garantir* 保証する, *reflectir* 反射する, *investir*

授ける, *orzamento* 予算, *endereço* 住所。これらの語彙の多くは書き言葉または話し言葉で共通ガリシア語となっている。

現代ガリシア語の作成と再生においては, その使用が社会的に認知され多くの場合に採用されたことにより 19 世紀のレシュルディメントから出発する文学的伝統を結果的に考慮したことになる。教養語の採用と科学技術用語においては, その起源と中世文学に共通した他の言語, ロマンズ諸語とくにポルトガル語と調和をもとめた。これらはガリシア語研究所とレアル・アカデミア・ガレーガによる『ガリシア語の表記と形態に関する規則』(1983) の作成にあたり原則となっている。同様にアルバレス, モンテアグード, レゲイラ『ガリシア語文法』(1986) の作成にも同じ方針がとられた。ロマンス語の一つとしてガリシア語の基礎的な文法規則の記述と形式化の道に一步前進したわけである。

語彙の体系化においては, ガリシア語研究所とレアル・アカデミア・ガレーガにより暫定的に発行された見出し語数五万の『ガリシア語の正書法に基づく語彙集』(1990) が基礎になった。この語彙集をベースにして, 二万五千語の『レアル・アカデミア・ガレーガのガリシア語辞典』(1997), さらに四万語の『シェライス社のガリシア語辞典』(1986, 1993), 九万五千語の『シェライス社のガリシア語大辞典』(2000) が刊行された。

1970 年代終わりからアカデミアによる再生ガリシア語の考えに対して, ガリシア語は自治州の言語ではなくポルトガル語の一部であると考え再統一派の運動が現れた。したがって, その体系化はポルトガル語に求めるべきだという考え方で, 表記の違いを説いているが両者の考えにはガリシア語の形態と語彙に大きな違いはない。ただ政治的なイデオロギーが関与しているように思われる。

再統一派の推す表記法の提案は『ガリシア語の表記と形態の規則に対する批判研究』(1983) となって現れた。ガリシア言語協会 (AGAL: *Associação Galega da Língua*) は再統一派の主要団体であり, この組織は四万語の総合語彙集を 1985 年に発行し, さらに再統一派の考えを取り入れたコスタ・カサス『ガリシア語学習の新文法』(1988) は新しい文法書である。アロンソ・エストラビース『ガリシア語辞典』(1995) は再統一派のなかで語彙の体系化を提案してガリシア語とポルトガル語の八万語の辞書となった。

言語正常化法の最初の補足的規定は規範の基準として「規則に関する問

題は、「ガリシア語の現行と正しい使用」をレアル・アカデミア・ガレーガが定めるとある。この責務を達成するためにはアカデミアは語彙研究部を創設して、ラモン・ピニエイロ研究センターの協力を得て 1996 年にガリシア語による用語の現代化および育成局 (Termigal) を開設している。

1999 年にガリシア語の表記と形態に関する修正をガリシア教育協会 (AS - PG) が求めたのに対して、2001 年アカデミア・ガレーガは修正案を作成し、2003 年 7 月ガリシア語の表記に関する新しい規則が承認された。これにより Galiza という表記が認められたことになる。自治州名は Galicia と Galiza の二つになるが、ガリシア政府はこれまで通り Xunta de Galicia を使用する。

### 結びにかえて・ガリシアにおける社会言語学の動向

ガリシア語の社会言語学の研究は、近年、優先的にすすめられている。ガリシアにおいてこの分野の研究に着手したのは、アロンソ・モンテーロ教授である。1968 年に発表された「ガリシア語の問題に対する 5 つの探索」と「ガリシア語の問題に三本のメスを入れる」の論文は、社会における異なる分野でガリシア語の状況と将来について研究した力作である。1973 年刊行された『ガリシア語に関するドラマティックな報告』は、ガリシア語の状況についての問題点を明確に指摘して、社会言語学の研究に実りある道を開いた。その数年後 1976 年には F. ロドリーゲス『ガリシアにおける言語紛争とイデオロギー』が出版された。

ガリシアにおけるガリシア語とカステイーリャ語の使用について学問的な接近を図った研究は 1970 年代初めには存在しなかった。唯一、M. アエスタラン・アラナスと J. クエバ・アロンソによる『1974 年ポンテベドラ県の家族たち (ガリシア主義とガリシア語の言語的紛争)』は学問的なレベルに達していた。これはセビーリャで刊行され、後の社会言語学研究の手本となった労作である。

コンポステーラ大学において社会言語学の研究がはじまったのは 1980 年代になってからであり、それは小中学校の生徒たちと教員たちの言語使用と言語にたいする態度の研究に集中した。これらをあげると、M.A. フェルナンデス「ガリシアにおける言語の維持と変革：最近の 50 年間の脱ガリシア語化のリズム」(1983)、H. モンテアグード他「小学生によるガ

リシアにおける二言語併用主義の社会言語学的見地」(1986), ルバル・ロドリーゲスとロドリーゲス・ネイラ「大学を除くガリシア語の一般教育」(1987), ロドリーゲス・ネイラとロペス・マルティーネス「大学におけるガリシア語」(1988) などがある。さらにガリシア文化庁がさまざまな領域におけるガリシア語の使用に関する報告書を刊行している。

1993 年以降現在, レアル・アカデミア・カレーガに社会言語学研究部が創設されてから, ガリシアの社会言語学地図三巻が作成された。これはガリシアの住民を対象に言語の使用と言語にたいする姿勢をアンケートにして質問した結果からデータを分析して公刊されたものである。2003 年は言語正常化法が施行されて 20 年になるので, ガリシア語の社会言語学研究は専ら言語正常化についての論議が醸しだされている。

#### 参考文献

- 浅香武和 (1998): 「ガリシア語の言語政策」津田塾大学『国際関係学研究』24,1-9.
- 浅香武和 (2002): 「ガリシア語へのカステイリーヤ語の言語干渉」神奈川大学『言語研究』24, 123-137.
- 浅香武和 (2003): 「少数言語の研究を巡って」『国際関係研究所報』38.
- Associação Galega da Língua (1983): *Estudo crítico das normas ortográficas e morfológicas do idioma galego*. Coruña.
- Alonso Estravís, Isaac (1995): *Dicionário da língua galega*. Santiago de Compostela, Sotelo Blanco.
- Alonso Montero, Xesús (1973): *Informe -dramático- sobre la lengua gallega*. Madrid Akal.
- Alvarez, Rosario/ Regueira, Xosé Luís/ Monteagudo, Henrique (1986): *Gramática galega*. Vigo, Galaxia.
- Ares Vázquez, M<sup>a</sup> Carme et al. (1986): *Dccionario da lingua galega*. Vigo, Xerais.
- Bouzada Fernández, Xan M. et al. (1997): *O futuro da lingua. Elementos sociolingüísticos para un achegamento prospectivo da lingua galega*. Santiago de Compostela. Consello da Cultura Galega.
- Chacón, Rafael (1979): “Diglosia e historia”, *Grial* 93, 349-364.
- Costa Casas, Xoán X. et al. (1988): *Nova gramática para a aprendizaxe da lingua*. A Coruña, Vía Láctea.
- Fernández Rei, F. (1988): “Posición do galego entre as linguas románicas”, *Verba* 15, 79-107.



- Fernández Rei, F. (1990a): *Dialectoloxía da lingua galega*. Vigo, Xerais.
- Fernández Rei, F. (1990b): “Nacionalismo e dignificación da lingua galega no período 1972-1980”, *A Trabe de Ouro* 1, 43-71.
- Fernández Rei, F. (1994): “Contribución das organización políticas á normalización da lingua galega (1963-1989)”, *Actas do XIX Congreso Internacional de Lingüística e Filoloxía Románicas*. Vol.6, 51-74.
- Fernández Rei, F. (2001): “A Proposta de acordo normativo do 2001”, *A Trabe de Ouro* 48, 97-120.
- Fernández, Mauro (1978): “Bilinguismo y diglosia”, *Verba* 5, 375-391.
- Fernández Rodríguez, Mauro A./ Rodríguez Neira, Modesto A. (coords.) (1994): *Lingua inicial e competencia lingüística en Galicia*. A Coruña, Real Academia Galega.
- Fernández Rodríguez, Mauro A./ Rodríguez Neira, Modesto A. (coords.) (1995a): *Usos lingüísticos en Galicia. Compendio do II volume do Mapa Sociolingüístico de Galicia*. A Coruña, Real Academia Galega.
- Fernández Rodríguez, Mauro A./ Rodríguez Neira, Modesto A. (coords.) (1995b): *Addenda a Lingua inicial e competencia lingüística en Galicia*. A Coruña, Real Academia Galega.
- Fernández Rodríguez, Mauro A./ Rodríguez Neira, Modesto A. (coords.) (1996): *Actitudes lingüísticas en Galicia. Compendio do III volume do Mapa Sociolingüístico de Galicia*. A Coruña, Real Academia Galega.
- Ferro Ruibal, Xesús (1998): “Porcentaxes de galego na prensa diaria. Dúas catas en outubro e novembro de 1998”, *Cadernos de Lingua* 18, 29-51.
- Ferro Ruibal, Xesús (1990): “Lingua galega e relixión”, *Grial* 107, 335-357.
- Freixeiro Mato, Xosé R. (1997): *Lingua galega, normalidade e conflito*. Santiago de Compostela, Laiovento.
- García Negro, M<sup>a</sup> Pilar (1991): *O galego e as leis. Aproximación sociolingüística*. Vilaboa, Cumio.
- González González, Manuel (1994): “Sociolingüística”, *Lexikon der Romanistischen Linguistik*, VI, 2. Tübingen, Nimeyer, 46-66.
- Goyanes Vilar, Helena et al. (1996): *A información en galego*. Santiago, Lea.
- Hermida, Carme (1995): “Contribución á historia do galego nos medios de comunicación. A prensa no século XIX”, *A Trabe de Ouro* 20, 71-83.
- Instituto da Lingua Galega e Real Academia Galega (1982): *Normas ortográficas e morfolóxicas do idioma galego*. Vigo.
- López Muñoz, Daniel (1989): *O idioma da Igrexa en Galicia*. Santiago de Compostela, Consello da Cultura Galega.

- López Muñoz, Daniel (2002): “Galego e Igrexa. Posibilidades e Atrancos”, *Actas do IV Encontro para a Normalización Lingüística*, Santiago de Compostela, Consello da Cultura Galega, 99-111.
- Mariño Paz, Ramón (1998): *Historia da lingua galega*. Santiago de Compostela, Sotelo Blanco.
- Mariño Paz, Ramón (2003): “A lingua galega hoxe”, *Xornadas de Coordinación de Políticas Lingüísticas*. Santiago, 22-26.
- Monteagudo, Henrique (1999): *Historia social da lingua galega*. Vigo, Galaxia.
- Monteagudo, Henrique e Bouzada, X.M.(Coords.) (2003): *O Proceso de Normalización do Idioma Galego (1980-2000)*. Vol.I Política Lingüística: Análise e perspectivas. Santiago de Compostela. Consello da Cultura Galega.
- Monteagudo, Henrique e Bouzada, X.M. (Coords.) (2003): *O Proceso da Normalización do Idioma Galego (1980-2000)*. Vol.II Educación. Santiago de Compostela, Consello da Cultura Galega.
- Monteagudo, Henrique et al. (2003): *A normalización lingüística, a debate*. Vigo, Xerais.
- Real Academia Galega (1997): *Diccionario da Real Academia Galega*. A Coruña.
- Recalde, Montserrat (1997): *La vitalidade etnolingüística gallega*. Universitat de València.
- Rodríguez, Franco (1976): *Conflicto lingüístico e ideoloxía en Galicia*. Monforte, Xistral. 増補版 Santiago, Laviovento, 1991.
- Rodríguez Neira, Modesto (coord.) (1998): *O idioma na Universidade de Santiago de Compostela (Resultado dun inquérito realizado no curso 1995-1996)*. Universidade de Santiago de Compostela.
- Santamarina, Antón (1995): “Norma e standard”, in Monteagudo, H.(ed.) *Estudios de sociolingüística galega. Sobre a norma do galego culto*. Vigo, Galaxia.
- Santamarina, Antón (1998): *A linguaxe e as linguas. Ramón Piñeiro revisitado ós 30 anos do seu ingreso na Real Academia Galega*. A Coruña.
- Silva-Valdivia, Bieito (2000): *A Sociolingüística*. Galaxia, Vigo.
- Vidal, Carme e Carballa, Xan (2003): “A Normativa de consenso xa é oficial”, *A Nosa Terra*, 1091. Vigo.

Web による参考文献

European Centre For Minority Issues,

<http://www.ecmi.de/doc/projects-recomm.html>.

Euromosaic (2000): *Galician Language Use Survey*.

<http://www.uoc.es/euromosaic/web/document/gallec/an/el/el.html>.

Mercator-Education (2001): *The Galician language in education in Spain*.

<http://www.mercator-education.org>.

**AGARDECIMENTO:**

Para realizar este traballo “O aspecto sociolingüístico á lingua galega”, axudaronme O Concello da Cultura Galega e O Instituto da Lingua Galega da Universidade de Santiago de Compostela. Eiquí agradezolles os favores ós todosos compañeiros do ILGa. Graciñas dende o país do Sol Nacente.